

Title	地方企業家の経済思想と福沢諭吉の地方観： 愛知県前芝村・加藤六蔵『経世書』の紹介を通して
Sub Title	The economic thought of local entrepreneur and Fukuzawa Yukichi's view of regions : a case study of the manuscript "Keiseisho" by Kato Rokuzō, Maeshiba village, Aichi prefecture
Author	石井, 寿美世 (Ishii, Sumiyo)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2021
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.37, (2020.) ,p.115- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：慶應義塾出身の経営者たち
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20200000-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地方企業家の経済思想と福沢諭吉の地方観

——愛知県前芝村・加藤六蔵『経世書』の紹介を通して——

石井寿美世

一 加藤六蔵と『経世書』

三河国宝飯郡前芝村（現・愛知県豊橋市）の加藤六蔵尚正（一八五八—一九〇九、幼名・幸三郎）は、筆録『経世書』を残している。^{〔1〕}後述するように、これは一八七九（明治一二）年に慶應義塾を卒業し、帰郷後しばらくしてから書いたものと思われる。

加藤六蔵正文の長男として彼が生まれ育った前芝村は、三河湾を臨む豊川河口に位置し、対岸には東海道の要衝・吉田を抱えていた。江戸時代初期から吉田藩に属しており、新田開発や海苔の養殖が盛んであった。ま

た、前芝湊は海運の要所で、廻船問屋が展開し、江戸までの廻船も発着した。明治以降の前芝村は、農業や海苔養殖を中心としつつ、養蚕、製糸など新たな産業も発展していく。

こうした土地を拠点とする加藤の生家は、元禄期に「前芝村庄屋」の地位にあり、幕末には吉田藩などへ御用金調達もしていることから、相当程度の資産を持つ大地主であったと考えられる。また、家業として醤油醸造業、蚕種製造業、廻船業などを行い、新田開発も手掛けている。さらに、父と祖父・広正（一七七〇—一八四〇）は、一八〇五（文化二）年に国学者・本居大平（一七五六一—一八三三）が吉田を訪れた際に門人となっており、加藤家の別荘には本居をはじめ多くの文人が逗留したといわれる。⁽²⁾一方、三河の人物で蘭学塾や洋学塾に在籍した者は、明治に入る頃までに約二〇〇名にのぼると推定されている。⁽³⁾吉田藩では一八二〇年代から蘭学の摂取が盛んに行われ、一八六七（慶応三）年頃からは洋学修業のため複数の藩士を江戸に派遣しており、その中には、後に福沢諭吉（一八三五—一九〇一）と親交を深くする中村道太（一八三六一—一九二一、横浜正金銀行、明治生命保険など）、阿部泰蔵（一八四九—一九二四、慶應義塾教員、明治生命保険など）も含まれていた。⁽⁴⁾また三河は、慶應義塾の中核を担った人物を多く輩出した土地としても知られている。⁽⁵⁾

このような知的環境に育った加藤は、一八七三（明治六）年一六歳の時、豊橋において洋学者・穂積清軒（一八三六一—一八七四）の好問社に入り、英語・数学・漢籍などを修めた。⁽⁶⁾一八七五年九月には慶應義塾の予備大人科第二番之二へ入学し、一八七九年四月に本科第一等を卒業する。⁽⁷⁾そして欧州への留学を希望するものの、父母が病に倒れたことで帰郷を余儀なくされて断念し、以後、家業の拡大に尽くす。加藤は先に紹介した家業の他にも、田園の改善、農具肥料の改良、米穀販路の拡張などを行ったといわれる。この傍ら、一八八一年に公立宝飯中学校を創設して初代校長（代理）となり、翌年、議論の場や書籍を提供する共奨社を創設し

た。また、一八八三年には宝飯銀行を設立して取締役となり、尾三農工銀行（一八九五）、宝飯貯蓄銀行（一八九九）などの立ち上げにも携わっていく。さらに、東叡鉄道（一八九四）など鉄道会社の設立を企画しており、外来の移植技術を取り入れたインフラ整備にも積極的であった。そして、一八九三年の豊橋商業会議所、翌年の豊橋米麦取引所の開設に尽力し、会議所の初代会頭、取引所の二代目理事長や会頭に就任している。この間、一八八六年から愛知県会議員、一八九〇年から衆議院議員を務めるが、彼の諸活動の基盤は主に郷里・前芝周辺にあり、家業だけでなく地域の教育や経済発展に資する活動も展開していたといえる。

加藤の筆録『経世書』は、所々に記された日付から、少なくとも一八八二年三月下旬には執筆が始まり、一八八四年三月までは筆が加えられていたことが分かる。こうした日付の記載に加え、誤字の塗りつぶし、空欄、文献からの抜粋などが散見されることから、これは刊行を目的として書かれたものではなく、日記・手控に近いといえよう。ただし内容は日々の出来事ではなく、政治・経済・法律・道徳・教育・家政などの項目ごとに、彼の所見や自己省察が記されている。加藤の経歴を踏まえれば、『経世書』は、慶應義塾を卒業後、已むを得ず帰郷し、家業や地域の諸活動を開始した時期に書かれたといえる。したがって、そこに記された言葉には、彼の置かれた状況を反映した思想が表れていると考えていいだろう。

本稿は、この『経世書』の全文を第四章に掲載した。すでに筆者はこれを部分的に引用した論考を発表しているが、管見の限り拙稿以外でこの史料が用いられたことはないと思われる。⁽⁸⁾したがって、全体が提示されるのは今回が初めてであり、新史料の紹介といえよう。そこで本稿では、『経世書』の史料的价值も考えるうえで参考となる特徴を加藤の経済思想という視点から三点述べたうえで、明治期の地方青年であり地方企業家でもある加藤を相対化するために、明治初期における上京遊学の意義および福沢諭吉の地方観との関連で考察を行う。

二 『経世書』に見る加藤六蔵の経済思想

『経世書』の特徴の第一は、経済活動における利益獲得の必要性と、精神・知識・人間関係の重要性が繰り返し説かれていることである。たとえば蚕業、塩業、農業、漁業などに触れ、「管見ヲ守株シ、精良ノ品物ヲ製スル能ハス。遂ニ損益相償ハス、半途ニシテ其業ヲ廢シ、嗚呼、到底取利ナキモノト臆断スルニ至ル」「概先祖先伝来ノ耕耘施肥法ニヨリ自許満足スル者ナリ。而シテ之レカ改良ヲ謀リ、收穫ヲシテ加倍スルノ長方ヲ索スルノ精神、毫纒モナシ」と記述している⁽⁹⁾。ここには、経済活動における頑迷な固陋旧弊と、旧法に満足して改良を試みず現状に甘んじる姿勢への強い反発が表れている。反発する理由は、そうした姿勢が良品の製造や收穫の増加を妨げ、「利」獲得の障碍となつてゐるからである。また、「粗悪」品の製造は「一時眼前ノ小利ニ暗迷シテ遂ニ遠_下永_上ノ大利ヲ失フ」ことだとも記している。つまり加藤は、経済活動における利益の獲得を重視しているのである。

経済活動において利益を重視することは自明かもしれないが、一九世紀日本の経済発展を考えた場合、それは大きな意味を持つであろう。周知の通り一八八〇年代後半の企業勃興は地方における工業化と広範な企業設立を含むものであったが、そこには、新たな事業活動に伴うリスクを負いつつも、工業化に即応することで収益を追求しようという意思を持つ者が存在したということである。地方で銀行・鉄道などの導入を図つた加藤はその一例といえる。先の引用文は農業など在家産業に関するものではあるが、工業化の原資がこの部門にあるとすれば、加藤の中で経済活動における利益の獲得は極めて重要と認識されたであろう。

彼はこうした経済活動に際し、精神性、知識、人間関係を重視している。たとえば「修身要則」と題された文章がある⁽¹¹⁾。家業や地域事業に着手し始めた「余輩」、つまり自らに対する自戒とも思えるこの箇条書きには、「艱苦勉励、其正鵠ニ達スヘシ。決シテ惰慢ニシテ悔ルコト勿レ」「活発散為ニアルヘシ」といった言葉が並んでいる。ここには、苦難などを堪える精神性、信念を貫きものおじしない能動性を持つべきという認識が表れており、それが「志望」や「事業」の遂行・達成と結びつけて捉えられている。ただし心のありようだけでなく、「万事ヲ注意研究スヘシ」「充分ノ智力ヲ以テ之ヲ為スヘシ」と、状況把握の能力、およびそれに必要な「智力」も重視されている。そして最後の一箇条には、「人望」を欠けば、「智能ヲ有シ、志望ヲ懷」いても十分に達成できないとあり、信用に基づく人間関係を前提としていることが分かる。とはいえ、これらを闇雲に追求すればいいわけではない。彼は、「先ツ志望ヲ立テ、……智能ヲ運シ、信用ヲ確クシ、一階ヲ昇レハ氣力ヲ加シ、復タ二階ニ達セハ、碎励ヲ強セハ、必ス富貴ナラサルモノ稀ナラン。……人事皆然サルヲ得サル矣⁽¹²⁾」と綴っており、「志望」を立て、「智能」と人間関係における「信用」を確かなものにした後、「氣力」さらに「碎励」という気概を持つという順序を構想している。

『経世書』には他にも、「名達ヲ得ント欲セハ、其レニ適スル事業成功ナルベカラス」「立身名セント欲セハ、之ニ適スル艱難ナルベカラス」「富貴ノ位置ヲ得ント欲セハ、パアシチブテアル可カラス」「不足而満足セハ、竟ニ一歩モ抄進スルコト能ハス」といった記述が非常に多く見られる⁽¹³⁾。したがって『経世書』は、「事業成功」を通じて「立身名」や「富貴」という社会的・経済的地位の獲得を「満足」することなく追求するにあたっての、克己ともいえるべき姿勢の重要性を記した決意文で占められているといっても過言ではない。そしてこれは第二の特徴にも通じる。

第二の特徴は、「家」の存続に関わる内容が多いことである。当時の地方企業家は、国家に対する意識を持っていたかもしれないが、まずは自らの拠り所である家、そして家や企業が拠って立つ地域が大きな問題だったのでないだろうか。加藤の場合、国に関わる直接的な言及は少ない。

一方、郡県や村に関する記述は多く散見される。たとえば、「鉄道ヲ敷設スヘナシ。然シナカラ貧弱ノ郡県ナルカ故ニ名按ヲ設ケ奇法ヲ編シ、而シテ其目的ヲ達スヘキナリ」「遠臨台ノ航海者ニ必要タル、言ヲ俟タス。然ルニ我村ノ遠台、其名アリテ実ナシ。……之レヲ改良スルヤ、必務タルナリ」と記している。⁽¹⁴⁾加藤は後に、豊橋を起点とし新城へ通じる東参鉄道の敷設申請者の一人となるが、この計画は豊川鉄道と路線が一部重複しており、先願の豊川鉄道に敷設権を取られる。⁽¹⁵⁾とはいえ、申請の一〇年ほど前から、「貧縮」の郷里に鉄道というインフラの導入が必要と考えていたことが分かる。また、前芝村の「遠臨台」に改良が必須と感じた理由は、物資の集散が盛んな地域の事情に鑑みたものであろうが、家業として後日実現することになる「米穀販売及び海運事業を営み其所有の船舶少なからず、近時航路を北海及び西海に延長し益々其拡張を計」⁽¹⁶⁾るためということも念頭にあったかもしれない。

このような記述にも見え隠れするように、言及の多さからすれば、次に示す通り加藤にとつての最大の関心事は「家」の存続にあったと考えられる。たとえば、醤油醸造などを営む経営者、そして大地主としての関心であろう、職人や小作人に関する描写が見られる。「各職人ヲ至当ノ法方ヲ設ケ等級ヲ確定シ其職業之時間ヲ定メナハ、職人雇主モ共大利アラシ」「地主ト小作人ノ合トニ於テ、猥リニ重圧ヲ定ムヘカラス」⁽¹⁷⁾。ここからも、事業における「大利」の獲得という認識が窺えるとともに、「職人」「雇業者」「地主」「小作人」という人間関係のあり方が意識されていることが分かる。

そして何よりも「家」への関心の大きさが表れているのは、自己省察ともいえる次の記述であろう。「余、幸ニシテ中等ノ家ニ生レ、多少ノ財産ヲ保チ、又、多少ノ智識ヲ得タリト雖トモ、猶以テ一トシテ満足安心スル能サルナリ。然ラハ如何シテ可ナルヤ。曰ク、第一身ヲ修メ、第二父祖ノ授与シタル家産ヲ増殖拡充セシメ、第三智識ヲ广大シ、論議ヲ深遠ニナシ、著作ヲ完瞭ニナシ、弁別ヲ巧達シ、以テ之ヲ事業ヲ実行スルニ在リ。而シテ、其目的ヲ成熟セシメンニハ、気力ヲ強健ニシ淬励シテ齷齪不撓、終身一日ノ如スルニナルノミ。呼^二鳴、亦艱難ナルカナ矣」「予、帰郷シ、家居スル既ニ五年……其間、家務ニ繫累スル全般ニアラス。而シテ学業進歩遅々タル悔ユベシ。今ヤ既ニ家政ヲ担佐ス。然ルト雖苦節大目的タル富貴ノ二達ヲ全然成功ヲナサシムベシ。之レヲ得ント欲セハ、其二対スル心労ナカルヘカラス。嗚呼、難カナ」⁽¹⁸⁾。両者とも、「財産」ある「中等ノ家」に生まれた加藤が「家産」を継承して「家政」を担い、「大目的」である「富貴」を達成するにあつたの決意と方法が記されている。

加藤は、自らを「智識」を身につけた資産家と認識している。とはいえ、「増殖拡充」「广大」「深遠」などの表現から、彼にとつて現状とは維持するものではなく、改善すべきものと捉えていることが分かる。しかし、向上心をもつて現実に積極的に関わるためには、自己の営為や努力が価値あるものという確信が必要であろう。加藤の場合、その確信を得る拠り所を三つのものに求めていたと思われる。それは、引用文に出てくる「身ヲ修メ」ることすなわち修身、そして「家産」「智識」である。

修身とは、「其目的ヲ成熟セシメンニハ、気力ヲ強健ニシ淬励シテ齷齪不撓、終身一日ノ如スルニナルノミ。呼^二鳴、亦艱難ナルカナ矣」と記しているように、特徴の第一で述べた、経済的な活動を支える精神性だと考えられる。一方、「智識」に関連して加藤は、「家務ニ繫累スル全般ニアラス。而シテ学業進歩遅々タル悔ユベ

シ。今や既ニ家政ヲ担佐ス」と述べている。ここからは、「家産」の拡大を図りつつ知識を身につけていくことが大きな課題であったことが分かる。これは、「家産」の「増殖拡充」と「智識」の研鑽は不可分であり、「智識」を家産拡充の要件として捉えていたからだと考えられる。彼が「智識」を重視していたことは、経歴からも窺える。たとえば宝飯中学校の設立は、愛知県に県立の師範学校と愛知県中学校の二校しかないため中等教育の場を欠いていた状況への対応であった⁽¹⁹⁾。また、知識研鑽の場を提供する共奨社も創設している。「智識」が「家産」の拡充と不可分であるとする認識に鑑みれば、「智識」を授ける教育は地域事業の発展と不可分だと考えていたのではないだろうか。

「家産」については「父祖ノ授与シタル家産ヲ増殖拡充セシメ」と記しており、他の箇所でも「身立名顕以テ富貴ヲ子孫ニ伝ユルヲ得ル亦難カラス」「祖先ノ遺産ヲ有シナカラ、常ニ収支其剰余ヲナセシコト稀ナリ」と綴っている。⁽²⁰⁾つまり、加藤にとって家産は、祖先から子孫へと継承されていくことにこそ意味があった。したがって「家産」の拡充そして次代への継承は、家政を担う彼にとって大きな「目的」であったはずである。そのため、修身も「智識」も「家産」増殖の要件と捉えられていたのではないだろうか。「中等ノ家」に生まれ「財産」「智識」を持つていたとしてもそれに「満足安心スル能サル」としたのは、家政を担う加藤が、「家」の存続という責務を強く意識していたからだと考えられる。「祖先ノ遺産」から「収支其剰余」を作ることに注目しているのも、第一の特徴で述べた通り経済活動における「利」を重視していたのも、このためである。

そして、かつて留学という夢を絶たれた加藤にとって、「家」の存続・「家産」の拡充だけでなく、それを足掛かりとした地域経済への関与も、自己実現の一つの形だったのではないだろうか。鉄道の敷設や「遠臨台」

の改良などの提起は、自己の営為に社会的意義を見出そうとしたことの表れとも考えられる。第一の特徴で示した、「事業成功」を通じた「富貴」「立身挙名」には、こうした意味も込められているかもしれない。「一大事業ヲナスノ人、之カ良師アルヤ。必ス皆自磨自進」「宇中ノ一事一物トシテ吾師ニアラサルハナク」という言葉からは、中央を離れ、海外でもなく郷里にあつて自己研鑽することで「一大事業ヲナス」という決意が読み取れるのである。⁽²¹⁾

最後に特徴の第三として、在来的な知識と、欧米由来の新たな知識とを接合させていることが挙げられる。先述の通り、加藤は「智識」を重視していた。彼が求めた「智識」の一つは、「算学物理学化学生活学人口学交際学」など欧米由来のものである。特に一卷には、福沢諭吉『民情一新』(一八七九)、S・スマイルズ著・中村正直訳『西国立志編』(一八七二)、J・S・ミル著・中村正直訳『自由之理』(一八七一)、モンテスキュー著・何礼之訳『万法精理』(一八七五—一八七六)などからの抜粋が見られる。『民情一新』については、「地方ニ於テ政党ヲ組製スベ」きと、地方政治に関する部分を参照している。彼は「余……県下ヲ巡視シ、各地ノ民情風俗嫌好趣旨ヲ觀察シ、深慮遠謀以テ今日ノ利害ヲ謨リ、将来ノ得失ヲ論究スルノ地方政治論ヲ著作スベシ」と考えており、これに必要な「智識」を、福沢の著作や翻訳書を通じて外国の事例から得ようとしていた様子が窺える。⁽²³⁾

また「経済」の欄には、A・L・ペリー著・川本清一訳『彼理氏著理財原論』(一八七六—一八八〇)、J・ガルニエ著・中山真一訳『理財論』(一八七八)などの文献を参照して、「欧米ノ文国ニ於テ、経済学ヲ講スル者、其宗トスル所、未タ一定セス」「経済学士第一等二列スベキ者ハ、スミス氏、ジベセー氏、リカルド氏」と「経済学」「理財論」の現況を把握しようとしていた様子が窺える。⁽²⁴⁾この背景には、「家」「家産」を重んじ

る加藤が、「家政理財ノ要」を得るべく「現今ノ資本ヲ一覽スルノ法ニ基キ、時ニ之レカ決菓ヲナシ、盛衰得喪ヲ解得」したいという思いがあったのかもしれない。⁽²⁵⁾ こうした抜粋からは、いわゆる知識人ではない、経済活動の現場に立脚する企業家として主体形成していった地方青年が、どのように欧米の学問を受容していたのかを窺い知ることができる。

一方、司馬遷『史記』『貨殖列伝』（紀元前九二）、荻生徂徠『訳文筌蹄』（一七一）や、儒者・坂井虎山（二七九八―一八五〇）の言葉など、明治期以前の言説の引用も随所に見られる。特徴的なのは、引用文に続いて、その内容に関する加藤の持論が記されていることである。たとえば、特徴の第一で引用した「先志望ヲ立テ……智能ヲ運シ……必ス富貴ナラサルモノ稀ナラン……人事皆然サルヲ得サル矣」⁽²⁶⁾は、陶朱や猗頓が富の獲得に十数年かかったという「貨殖列伝」の抜粋の後に綴られている、加藤の見解である。また、南総に流された父と共に暮らした一三年間、師友に頼らず過ごしたという荻生徂徠『訳文筌蹄』の序文を引いた後、「世言、良師益友ニ併テ知識ヲ得、而シテ拔群ノ士トナルコトヲ得ヘシト。予謂フ、大ニ誤レリト。何ントナレハ、師友ニ学フハ常人トナルヲ得ルノミ。……独立不撓ノ志ナキ者ハ、出群タルノ人タルヲ得ル能ハス」と記し、徂徠の言葉に則って、持論である経済的な活動を支える精神性について説いている。そしてこれとは逆に、「我意、之レト大異也」⁽²⁸⁾と反論材料として先人の言葉を引いている場合もある。

このように欧米由来の知識と在来的な知識の両方を視野に入れていたのは、「凡事物ニ疑念ヲ起」こして「千思百考」「熟知格物」するためには「実物ヲ観察シ実事ヲ審察スル」という西洋由来の知識に、「独立不撓ノ志ナキ者ハ、出群タルノ人タルヲ得ル能ハス」といった精神性に関してでは在来的な知識に学ぶところが大きいと認識していたからではないだろうか。⁽²⁹⁾ 「志望」や「事業」の遂行・達成に知識と精神性の両方が必要と考

えていたことは第一の特徴で触れた通りだが、両者の獲得は外来の知識と在来の知識との接合によって実現できるものと考えていた様子が窺えるのである。

三 明治期地方青年の上京遊学と福沢諭吉の地方観

『経世書』に表れた加藤の経済思想などには、当時の地方青年の姿を見て取ることができる。幕末から明治のはじめにかけて、洋学は主に知識人によって摂取され、その新しい学問への理解は、儒学など従来の学問との相関・相克の関係で捉えられ深められていった。³⁰しかしこうした動きは知識人に限ったことではないであろう。明治初年から半ばまでは、立身出世を鼓舞する言説が溢れた時代であった。『西国立志編』、『学問のすゝめ』（一八七二—一八七六）などは、青年の夢をかき立てたといわれる。³¹ただ、立身出世といっても、必ずしも高位高官のみが目指されたわけではなく、その様相はさまざまであった。こうした中に、地方企業家の道を選んだ者たちがいた。先述の通り、日本では一八八〇年代後半に本格的な工業化を迎える。当時、各地に広範に展開して工業化を下支えした在来産業を担ったのは、地方企業家である。この時、彼らは単に知識欲の充足という目的に留まらず、欧米由来の知識を社会に還元する道を模索したのではないだろうか。そしてその際、加藤をはじめとする当時の青年たちは、欧米の新知識を、和漢学などの在来的知識に接合させて受容し、それを家業や地方の産業発展に結実させたのである。

たとえば、家郷の神奈川県小田原・足柄周辺地域の活性化を図ろうとした山口左七郎（一八四九—一九一〇）は、父の世代から報徳思想の影響を受け、国学・儒学も基礎知識として持っていたが、『西国立志編』、

『自由之理』、『西洋事情外編』（一八六八）、『西洋国尺』（一八六九）などの書籍を読み、洋学の学習にも力を入れていた。⁽³²⁾ また、郷里の静岡県浜松で銀行、鉄道、教育機関などの設立に力を注いだ伊東要蔵（一八六四—一九三四）は、家産の増大を図るには「物理学、化学……心理学、経済学、政治法律」などの欧米由来の知識とともに、「孝悌忠信」「国家ヲ愛スル」といった「道德心」を持つことが重要と考え、家のみならず「社会ヲ發達進歩」させることの必要性を説いている。⁽³³⁾

さらにこうした地方青年は、家郷で事業に従事する際、知識以外の要素も重視した。たとえば長野県上田で器械製糸結社を設立した下村亀三郎（一八六七—一九一三）は、「製糸ノ業一般ニ進マス、学理ノ応用ナク粗製濫造ニシテ均一ナラサルニ因レリ。此ノ如キハ小ニシテ各自ノ不利、大ニシテハ一國ノ損害ナリ。……依テ余等茲ニ蒸氣製糸器械ヲ建テ製糸ノ改良ヲ計ラントス。益之レヲ擴張シテ永遠ノ利益ヲ計ラントス。……百折不撓ノ志ヲ以テ其ノ目的ヲ達セントス」と、知識とともに精神性、利益を重視しており、自己の起業行動を社会的有用性のあるものと意義付けてもいる。⁽³⁴⁾ 重要なのは、彼らがいずれも一八八〇年代後半から本格化する地方の企業勃興に積極的に関与している点である。

在来的な知識は、明治の地方青年が幼少期を近世の空気の中で過ごしたことを考えれば、基礎的な素養として底流していたと考えられる。一方、欧米由来の知識の受容経路は、山口のように書籍の場合もあれば、その他に上京遊学の場合も考えられる。「近代の窓口」と見なされた東京の私学で、地元では得ることが難しかった「近代学知」を身につけようと上京したのである。⁽³⁵⁾ 実際、加藤も、そして先述の伊東も下村も、慶應義塾への上京遊学を経験している。彼らの多くが幕末の生まれであることを踏まえれば、物心つく以前から欧米を富強と見る雰囲気があり、洋学も台頭していたため、遊学によって得るべき知識は西洋由来のものと判断すること

とに迷いは無かつたのではないだろうか。⁽³⁶⁾

もつとも、数ある中央の高等教育機関のうちどれを選ぶかは個別の事情によるであろう。郷里の群馬県伊香保を単なる湯治場ではなく西洋に做つた療養地に変革した木暮武太夫（一八六〇—一九二六）は、一八七八年から二年ほど慶應義塾で学んだ後、福沢の助言に従って家業の温泉業に就いたといわれるが、最初の遊学地は築地立教学校（現・立教大学）であつた。⁽³⁷⁾一方、加藤の場合、好問社での穂積清軒との接触が大きいと考えられる。穂積は叔父・中島三郎助（一八二一—一八六九、幕臣）の勧めで蘭学を志し、川本幸民（一八一〇—一八七一、蕃書調所教授で福沢の上司格）などに師事した。好問社では関根録三郎（一八四一—一八九〇、丸屋商会社員ほか）、阿部泰蔵などが学び、世話方には中村道太が就いた。中島は米国から帰国した福沢の謹慎を解く助力をした人物で、その他の関係者の顔ぶれからしても、穂積・好問社は福沢と浅からぬ縁があつたといえよう。⁽³⁸⁾穂積自身、「福沢先生の京都学校記を見るに……同志の者と謀り成たけ教方を便利にして、早く日用に足るよふになす」と、⁽³⁹⁾教育方法について福沢の『京都学校の記』（一八七二）を参考にし、読方の授業では『西洋事情』（一八六七）を使った。伊東の場合は、中学在学時の教員で、「慶應義塾に入つて英語を学ばんがため……慶應義塾の学風を仄聞し、頗る福沢諭吉に傾倒していた」⁽⁴⁰⁾ 渋江保（一八六三—一九三〇）に同行し、一八七九年に入学している。下村の場合は、長男という理由で親の反対を受けていたが、福沢に関心を寄せていた小学校の恩師の手助けにより、家出同然ながら一八八五年に入学を果たしている。

木暮を除く者たちは、福沢に心服していた周囲の人物に感化されて入塾しており、慶應義塾が選ばれる理由として、福沢への師事と、渋江のように英語を学ぶ機会を求めた場合が多かつたのかもしれない。たとえばいわゆる学校案内を見ると、一八九〇年には「普通の英学を修めむとする者は慶應義塾、東京英学院……」⁽⁴¹⁾と宣

伝されている。ただし慶應義塾の紹介欄には、「本塾は我邦私立学校の巨擘と称すべき者にして、其基礎固く、其施設広く、実に福沢諭吉翁が慶応年間に於て創設したる最も年旧き学校⁽⁴²⁾」とあり、福沢という看板がクローズアップされている。一八九九年になると、「英語英文の練習を力め、主として英書に依り、普通及び専門の学科を教授する所……監督は福沢諭吉翁にして、数十名の講師あり⁽⁴³⁾」と紹介され、英語学習に焦点が置かれて、福沢を前面に押し出す傾向は弱くなる。この時期より前、特に一八八〇年代は、都会に出てきてから行きたい学校を決めるというのが一般的であったといわれるが、学校案内の記述の傾向からすれば、明治前半に入学した加藤と同年代の青年たちには、慶應義塾は英語塾かつ福沢の塾と認識されていたと考えられるだろう。⁽⁴⁴⁾

福沢は加藤たちの世代が慶應義塾で学んでいた頃、塾生に向かって次のような演説をしている。「我慶應義塾の教育法は……満塾の学生をして即身実業の人と為らしめ……銭なき者は即日より工商社会の書記、手代、番頭と為る可く、或は政府が人を採るに漸く実用を重ずるの風を成したらば、官途の営業も亦容易なる可く、幸いにして資本ある者は、新に一事業を起して独立活動を試む可く、或は地方の故郷に帰りて直に父兄を助け又は家を相続して、慥に遺産を保護して又増殖するの知見と胆力とを得せしめん⁽⁴⁵⁾と欲する者なり」。ここでは、塾生が「即身実業の人」となることを求めつつ、「銭」の有無によってそのあり方が異なつて構わないと説かれている。つまり、資金のある者は起業もしくは帰郷して家業に就き家産を増やす、そうでない者は実業界で雇用労働者・専門経営者あるいは実務官僚となるという違いである。また、企業勃興期を迎える少し前の一八八〇年代前半には、「資産ある身分にて且つは文明の学問を磨き得たる人なれば、今日の日本なれば、何れの地方、何れの郷土にも、挙ぐべくして挙げざるの事業、千百番ならず、日新なる学問の応援を待つ切迫

なる折柄、幸ひ其地方の人が永く京地に学問を研究して一旦郷に帰らば、挙らざるの事業と施すべきの実学と相投合して、其事業を斡旋する、実に百事掌上の物なる筈なれ⁽⁴⁶⁾」学業の成る後は早々日故郷に帰りて、父祖の遺業を継ぎ又自ら新事業を起し、所得の学問を田舎の土産にして之を家業の方便に用ゆべしとは、毎度これを語り又紙に記したることもある……我輩は最初より地方の人物を頼み甲斐ある人物と信用して疑はざる⁽⁴⁷⁾などと、上京遊学した地方出身者は郷里に帰り、身につけた「文明の学問」「実学」を家業や地方での起業に役立つべきと繰り返し唱えている。

併せて福沢が強調したのは、「桃源の旧眠」にあつて必ずしも「文明の新思想に改良」されていない地方で学問を身につけるのではなく、上京して広い知見を得るべきということであつた⁽⁴⁸⁾。そのため、複数の地方資産家に「仮令塾え御入社ハなくとも……終歳地方ニ而已御住居よりも、若しも御都合御出来ならハ、折々御出京相成度、人間最第一の活学問なり⁽⁴⁹⁾」といった書簡を送つており、「知識を交換し世務を諮詢する⁽⁵⁰⁾」交詢社への入社も勧めている。先の山口左七郎も入社した一人であり、加藤の場合は入社するだけでなく、共奨社を通じて豊橋における入社勧誘活動も行つている。

ここで『実業人傑伝』（一八九五—一八九八）に記載された事業家の経歴を見ると、掲載総数四〇八名の中で加藤と同じ世代は八一名いる。このうち上京遊学をする者は約四割の三三名で、遊学後に帰郷して事業にあつた人物は二一名である。就学先は、判明する限りで慶應義塾、同人社、明治法律学校、東京開成学校など多様であり、これは明治期において上京遊学の持つ意味が、新しい時代の動きを実感として受け止める機会であつたことを物語つて⁽⁵¹⁾いる。当時、「成る可く児童の心中に郷里を愛して、而も郷里を出づる厭はず、我邦土を愛して而かも我国境を出づるを厭はず⁽⁵²⁾」などと、郷里を出ることは郷里を想ふことと表裏

一体と認識されることもあった。実際、彼らは修学後に帰郷して林業・酒造業などの家業に携わるだけでなく、加藤のように銀行業・鉄道業など地域の経済的インフラ事業を展開している。

ただし加藤の場合は、「東京ニ遊学シ、学業既ニ成レリト自信スルハ、世ノ文明ヲ知ラサル管見小人ト評セサルヲ得ス。……海外各国渡航シテ、文明界ノ新理新事ヲ両輪スヘキナリ」と綴っているように、本来は遊学後に留学を強く希望していたと考えられる。しかし彼は帰郷を余儀なくされる。その理由は家の事情であった。伊東の場合も養嗣子となったためであり、下村も長男であるがゆえの帰郷要求という要素が大きかった。こうした事例には、相続や家業の継承といった家の枷から解放されずに帰郷を余儀なくされた地方青年の姿が見て取れる。彼らは、意に反しての帰郷とはいえ、郷里において遊学経験を活かし、果たせなかった夢の幾許かを地域産業の場を実現させるのである。加藤のように、上京遊学を果たす子弟の家は近世から続く地主などである場合が多かった。したがって、上京遊学で得た知見を、家業だけでなく銀行・鉄道といった新たな事業の起業に活かしたことは、近世において村内の「分」に基づく行動規範の内面化が進み、資力に比例して「村」への経済的負担に応じるといふ協調的な行動がとられるようになっていたことの、近代の変容ということができるかもしれない。⁽⁵⁴⁾

四 『経世書』の書誌情報・翻刻

『経世書』の書誌情報は次の通り。著者は加藤六蔵尚正。底本は豊橋市立美術館博物館収蔵、「加藤家文書（追加）」、文書番号七三三。和装二冊。一卷は縦五一五ミリ×七二八ミリ、二巻は縦五〇五ミリ×七二〇ミリ。表

紙はともに薄茶色の厚紙。表紙の左肩に縦書き毛筆で「経世書 一卷」「経世書 二卷」。一卷は一六二頁、約九九〇〇字、一頁一一行、平均一行約一四字。⁽⁵⁵⁾二巻は一八八頁、約三八〇〇字、一頁一〇行、平均一行約一四字。両巻とも縦書き毛筆。

凡例

できるだけ原本に忠実であることを心掛けたが、若干の変更を行った。

- 一. 旧字体は原則として新字体に改めた。
- 二. 変体仮名は平仮名に直し、句読点を加えた。
- 三. 複合略字は正字に改めた。
- 四. 難読箇所は「」内に記し、判読不能箇所は□とした。
- 五. 明らかに誤字と思われる箇所には、「カ」とルビ注を付した。
- 六. 原文のルビや傍線はそのまま付した。
- 七. 欄外注は〔欄外〕と付した。
- 八. 空白箇所は原本のまま空白とした。

経世書 一卷

目次

政治 第一

經濟	第二
法律	第九
道徳	第三
教育	第四
家政	第五
三業	第六
格物	第七
雜類	第八

政治

〔欄外〕 福沢先生民情一新第五章ヲ看ルベシ

○地方ニ於テ政党ヲ組製スベシ。然ラサレハ、国会起リ議員ヲ会スト雖モ、何ノ益カ之レアラン。猥ニ郡国ニ由リ説ヲナスベケンヤ。英国其他ヲ以テ視ルベシ。

〔欄外〕 民情一新

○英国ニ於テハ、政府ノ官吏ニシテ国会議員タルヲ得ルトナリ。

〔欄外〕 ミル氏自由ノ理ヨリ抄出

○加爾平^{カルピン}ノ理論ハ、人民各自ニ意見品行ヲ締造撰択スベシト（ミル氏ノ説）イヘル説ト大ニ異ナリ、其理論ニ謂ラク、人ノ罪過ハ我見ヲ執ルヨリ大ナルハナシ。人生ノ祥善福祉ハ遜順ノ心ヨリ生ゼリ。汝ノ揀択

ノ見ヲ生スル勿レ。汝ノ職分外ノ事ヲナスナカレ。コレヲ為ハ罪過ナリ。人ノ性ハ元來敗壞シタルモノナレハ、自カラ其本性ヲ絶滅セサレハ罪ヲ贖ナフヘカラス。凡人ニ存スル才能感覺ノ類ヲ屈服スルハ悪事ニ非ス。人ハ自己ノ為ニ才能ヲ求ムベカラス。タ、上帝ノ旨ニ凜遵スベシ。コノ目的ニ非スシテソノ他ニ才能ヲ用ヒナハ、才能ノナキカタガ善ナルベシ。

〔欄外〕自説

○圧抑ニ数類アリ。曰ク直接圧抑、曰ク間接圧抑ナリ。而シテ直接ヤ世人喋喋非難スルコトアレトモ、間接ヤ人未タ感セス弁セス。恰モ満色得意ノモノノ如シ。此害毒ヤ殊ニ酷劇也。狡猾者ハ其拙ニ捫ラスシテ、其巧且成ル者ニ是レ依頼ス。故ニ、苟モ正理公道ヲ崇奉率先者トナルモノ、其酷劇ナル圧抑ヲ摘発シ、而シテ之ヲ退治セサル可カラス。

〔欄外〕十五年五月十三日

○天正元和之際、天下ノ大権ヲ掌握セシ者、我愛知県ニ於テ三氏ヲ出ス。戊辰ノ際、天下ノ全権ヲ左右スル者、西陲ノ諸蕃ニ帰セリ。向後政道一変シテ、大権ヲ獲取スルモノ果テ何人ナルヤ。唯智徳ノ高キ人、之ヲ獲ルノミ。無氣無力ナル尾参ノ兄弟、夫レ之ヲ如何トカスル。

〔欄外〕セルフヘルフ

○蓋シ人民ハ政事ノ実体ニシテ、政事ハ人民ノ虚影ナリ。

〔欄外〕同

○所謂開化文明ト云モノハ他ナシ。其国ノ人民男女老少、各自ニ品行ヲ正シ、職業ヲ勉メ、芸事ヲ修メ、善スル者、合集シテ開化文明トナルナリ。

〔欄外〕同

○邦国ノ昌隆ハ、人民勉強ノカト正直ノ行ニ在ルナリ。邦国ノ衰退ハ、懶惰ニシテ自ラ私シ、穢惡ノ行アルニ由ルナリ。故ニ、苟モ世ヲ利セント欲セハ、善政ヲ施スヨリ国民ノ勉強善行ヲ勵獎スルニ在ルナリ。

經濟

〔欄外〕米國アーゾル、ラヴァム、ペーリー氏ノエレメンツ、ヲフ ポリチカル エコノミー之緒言訳曰
理財原論

○欧米ノ文國ニ於テ、經濟學ヲ講スル者、其宗トスル所、未タ一定セス。概シテ三派ノ別アリ。ペーリー氏ハ第三派ニ屬シ、コンヂラ氏、ホウエートリー氏、バスチアー氏、セワリエ氏ノ流ナリ。初メ其徒ト此學ヲ講スルノ際、專英國ノ經濟學家スミス氏、リカルド氏、セニヤル氏、ミル氏ノ書ヲ用ヒ、傍米國ノ學士ケーレー氏、ウエーランド氏、ボーウエン氏、バスクム氏ノ說ヲ參考スルコト十數年、其間、此學ノ未備サル所アルヲ覺ユ。バスクム氏ト切磋討論シ、終此書ヲ著シ、先人未發ノ說ヲ述ヘ、以テ此學ノ欠クル所ヲ補ハント決タリ。

○シヨセフガルニー著、理財論ニ云フ、經濟學士第一等ニ列スベキ者ハ、スミス氏、ジベセー氏、リカルド氏、三氏最有名也。其他ウーバン氏、ボアギーウバル氏、ジュトー氏、ムロン氏ノ如キ經濟ノ事ナル論、尤モ確説ナリト云ベケレトモ、皆千六百年代、或ハ千七百年代ノ始メニ於ケル實事ト理論ニ係ルヲ以テ、其後ニ行ハル、所ノ經濟學上ノ諸論ト自ラ背馳スル所ナキ能ハス。其後、マルチュース氏、スカルベーク氏、セニヤル氏、ロスセル氏ノ如キ、全ク理財ノ事ヲ論究セス。シスモンジー氏、ロシー氏、スト

ルク氏ノ如キモ、教語ヲ以テ之レヲ論ス。又、スチャルミール氏ハ晩近経済ノ諸論ヲ包括シタル「経済学」ト題スル書ヲ公布セシカ、其書中、理財ノ事ヲ唯其原論ノ略述ニ過キス。其他、ボアスランドリー氏、パシー氏、ジラルデン氏、ピユイノード氏、ジエムバストル氏、プールドン氏ノ諸氏アリ。

〔欄外〕理財原論ニアリ

○ヒロドスユス氏ト云ル高名ナル歴史家ノ説ニ、貨幣鑄造ハ、小亜細亞中、リヂアン部ノ人ヨリ始マルト。此記、最信スヘキニ似タリ。

〔欄外〕同上

○経済ノ事ヲ論述シタルハ、アデンノゼノホン氏ヲ以テ最古トナス。此人、紀元前五百年代ノ中頃ニ方リ「オンウェース、エント、ミインス」ト題スル一小冊子ヲ著セリ。其書中ノ数篇ニ於テ経済ノ論セリ。多クハ放誕ニ属スト雖、然レトモ、問亦確乎。不拔ノ理ヲ載スル所アリ。

法律

○万法精理中、特ニ控行シテ以テ議論ノ資トナセシハ、タシトス及ブルタルキノ二家ヲ以テ居多ナリトス。

〔欄外〕万法精理

○国家ノ為ニ法律ヲ制定スルニハ、宜ク其國風土ノ寒燠土壤ノ肥瘠、其地置広狭及其民ノ營業 農工商漁 獵牧等 ノ差異ニ関涉シ、且其建國ノ憲典ニ依リテ人民ニ付与スル所ノ自由權ノ厚薄、若クハ其信奉スル所ノ教法ノ異同及風習世俗ノ好惡、戸口ノ疎密、貧富、奢侈、貿易、交際等ノ関涉ヲ參伍斟酌セサル可カ

ラス。之ヲ要スルニ、法律制定スル所ノ淵源ハ、必竟制法者ノ意思及ヒ之ヲ設立スル事情ノ緩急形勢ノ順序ヲ照シテ、彼此關涉スル所アリ。凡ソ此數件ハ悉ク之ヲ包括シテ一モ省略セサルヲ要ス。

○レハフリカン、モナアキー、テスホチック 專制政府 ナリ。之ヲ政府ノ三類ト稱ス。此三類ノ形質ヲ知ラント欲セハ、尋常ノ見解ヲ下シ、之ヲ求テ其字義事蹟ヲ得ベシ。即チ、人民ノ全部、或ハ其一部ニテ一國ノ全權ヲ抱宰スル、之ヲ共和国政ト云フ。一君アリ一定ノ憲法ニ則リテ以テ其國ヲ治ム、之ヲ立君政治ト云フ。一人ノ喜怒ヲ以テ政治ヲ任意放行シ、制度法憲ノ之束制スル者ナキ、之ヲ專制政治ト云フ。各國政府ノ形質、概ネ此三類ニ外ナラス。

○共和政治ハ、立君政治ニ於ルカ如ク、議政官又元老院ヲ設置シテ其翼賛獻替ヲ求ムヘシ。此議院ノ須要ナルコトハ、或ハ立君政治ニ勝ル者アリ。然レトモ、既ニ此議院ニ信任シテ其弊害ナカラシムコトヲ欲セハ、先ツ其議員タル者ヲ撰定スル方法ヲ齊調セサル可カラス。

其法ハ、雅典ノ如ク人民ヲシテ親ク之ヲ撰擧セシムルモ可也。羅馬ノ如ク、國中ノ人民ニ命シテ其初幹事官ヲ保擧シ、此幹事官人民ニ代リテ其人ヲ撰擧スルモ亦可也。人民ハ己カ權利ノ一部ヲ托信ス可キ者ヲ撰擧スルニ甚タ堪能ナル者ニシテ、而シテ其撰擧ナスヤ、必ス人民ノ束手傍觀ス可カラサル事情ト衆目トニ触レテ、明瞭ナル實事トニ有ルヲ要ス。例ヘハ、數回ノ戰爭ヲ經過シ汗馬ノ功勞アル者ハ、其將略名望能ク衆ノ知ル所ナレハ、將帥ノ如キハ人民ノ公選ヲ以テ其當ヲ得ル者トス。又、法ヲ執リテ公平ニ審判シ、毫モ冤枉ナク苞苴門ニ絶ヘテ能ク人民ノ心ヲ悦服セシムルモ、衆ノ知ル所ナリ。故ニ、法官モ人民ノ公選ニ任セテ可也。又、能其家ヲ壯麗ニシテ其富ヲ致シ、衆ニ知ラル、者ハ、其人ヲ推テ公物ノ總官ニシテ可也。此數事ハ皆、人民ノ耳目歷然タルヲ以テ、其人ヲ撰定スルカハ、人君廟堂ニ於ルヨリモ、人民ノ公會

ヲ以テ更ニ勝レリトス。然トモ、紛乱シタル機務ヲ理シ、其地ニ応シ、其時ニ会シ、機会失セスシテ政事ヲ執行スルト否トノ器量ノ如キハ、人民公会ノ堪能シ得可キ処ニアラサルナリ。

人材ヲ鑑定スル事ニ就テハ、人民天稟ノ才能アルアリ。故ニ、古ヨリ一時ニ僥倖ニ出テ、其撰挙ヲ誤リタルヲ見ズ。之ヲアテン、ローマノ政事ニ徴シ、選挙ノ始末ヲ考ヘ以テ其疑フ可カラサルヲ知ル可シ。

道徳

〔欄外〕蘇老泉 上田枢密書ト参考スベシ

○凡事、吾伺思善散憚矣、之レヲ言ニシ之レヲ行フベシ。而シテ、人ノ之ヲ可シ之レヲ用サルハ、其罪、彼レニ有リ。善ト思テ之ヲ言行セサレハ、其責、吾ニ有リ。自卑屈ニシテ後世ニ笑ル、ナカレ。

○仏徒カ耶蘇教ノ我国ニ伝播スルヲ憂慮スルヤ、切也。亦、政府モ之レヲ禁シ、学者モ之レヲ防ム。或ハ法律ヲ以テ、或ハ説論文章ヲ以テシ、全国汎ク遏妨スルモノト謂フベシ。然レモ、^{〔下七セカ〕}幸ニシテ一旦之レヲ妨クルト雖モ、其本ヲ務メサレハ、所謂外形ヲ羈止スルモノニシテ、遂ニ其功ヲ発セルヤ、必セリ。何ントナレハ、彼レ我レヨリ宣教授道ノ善良ヲ有スレハナリ。真ニ之レヲ遏妨セント欲セハ、国教ニ於テ宜ク其本ナル宣教授道ニ改良ヲ加ヘ、忘誕ヲ除キ真理ニ就キ世ヲ利益セハ、唯ニ耶蘇ノ伝播ヲ防クノミナラス、益亦全球上ヘ普流スルヲ得ベキ矣。仏徒輩勉メスンハアル可カラス。

教育

○凡事物ニ疑念ヲ起スベシ。卒カニ忘信スベカラサルナリ。日用ノ廉務亦然リ。況ンヤ永遠微蘊ノ真理ニ

於テヲヤ。千思百考セスンハアル可カラズ。而シテ后、熟知格物ノコトヲ談スヘシ。

〔欄外〕論理学ト參觀スベシ

○耳目鼻口首肢ヲ備具シタルモノハ人ナルカ。曰ク、人ニアラス。然ラハ、衣冠ヲ着シ各ノ其行務ヲ勉ムルモノニシテ而シテ人ナルヤ。曰ク、否。貴賤貧富、其分ニ從ヒ其法ニ由テ行フテ可ナルヤ。否。曰ク、人タルモノ者、算学物理学化学生活学人口学交際学ヲ解シ、己ヲ治メ、人ニ交リ、世ヲ進メ、邪曲ニ陥ラス、異怪ニ驚スシテ、天然ノ本分ヲ行ニ而後、始メテ万物ノ靈ト謂フベシ。呼ニ鳴、真人タル難乎。

○徂徠先生云、予、十四流落南総。二十五還東都。中間十有三年。日与田父野老偶処尚何問有無師友。独頼先大夫筐中。蔵有大学諺解一本。実先大父手沢。予獲此研究用力之久。遂得不籍講説。遍通群書也。

故、苟モ立志、而シテ氣力ト勉強トアレハ、何ソソ師友ナキヲ憂エン。又、何ソソ資時ナキヲ憂エンヤ。唯一心用力スルニアルノミ。世ノ遊惰ノ夫、無氣力ノ者、則言、氣力ト時間ナシ。故ニ、志ヲ立ト雖トモ、遂ニ其目的ヲ達スルノ方便ナシ。又言、吾レニ良師益友ナシ。和氏ノ璧ト雖トモ、豈ニ燦然タルコトヲ得ンヤ。予カ不幸ノ位置、道德ニ堪タリト。何ソソ知己ノ朋ナキヤ。古ノ英傑俊儒ノ位置ヲ看ヨ。反テ常人ヨリモ究スルノ者多シ。而シテ千辛万苦ヲ嘗メ、愈ヨ志ヲ堅メ、遂ニ成功ヲ完セシナリ。

予曰ク、吾ニ立身ノ好方便アレトモ、吾愚矣、遂ニ用ユル能ハス。自棄自暴ニ送ルヲ満足スル者ナリト。○世言、良師益友ニ併テ知識ヲ得、而シテ拔群ノ士トナルコトヲ得ヘシト。予謂フ、大ニ誤レリト。何ソトナレハ、師友ニ学フハ常人トナルヲ得ルノミ。試ニ思ヘ、一大事業ヲナスノ人、之カ良師アルヤ。必ス皆自磨自進、遂ニ右大事業ヲ發興スル者ナリ。故ニ、独立不撓ノ志ナキ者ハ、出群タルノ人タルヲ得ル能ハス、常人タルノミ。

家政

〔欄外〕自説（十四年十二月六日報知新聞ト参看スベシ）

○明治八年改租ノ際、米価壹石五円六十銭ナリシニ、年々貴騰シテ、十三年ニ至リテ八十二円二進ム。然ルニ地租従前ハ二分五厘金納タリ。農家富裕ナル古今稀有ト謂ベシ。此時ニ当テ蓄貯セスンハ、寛嚴循環等一層ノ慘苛ニ沈ムベシ。

○何事モ不屈挑勉セサレハ、其目的ヲ達スル難シ。看ルベシ、英雄豪傑ノ史伝ヲ。砍々汲々困難ニ遇テハ益勵ミ、漸ク以テ大事ヲ得シノミ。凡庸ノ者、思サルベカラス。

○家政理財ノ要ハ、西人簿記学者ノ格言ノ如ク、現今ノ資本ヲ一覽スルノ法ニ基キ、時ニ之レカ決菓ヲナシ、盛衰得喪ヲ解得セサレハ、自許過益ト思セシ者、反テ失策ノ結果ニ及ヒ後救フノ術ナキニ至ル。其例証比々タリ。豈恐レサル可ケンヤ。豈慎マサルベケンヤ。

○陶朱、住於陶業陶者四通之地而交易之術也。治産、十九年之間三致千金。猗頓、魯之窮士也。耕則常飢、桑則常寒。聞朱公富、往問術。公曰、欲速富、當蓄五特。及適河東、大蓄牛羊鶴鴨滋息不可計、十年間、貲擬王公。由是觀之朱公猗頓名士ト雖モ、数十年ニ到ラサレハ富ヲ致ス能ハス。況ヤ凡庸ノ夫ヲヤ。故ニ、志シ富ヲ成ニアラハ、迭次ニ望ム可ラス。必ス数十年如クハ數世ヲ以テスベシ。譬ハハ、人事ハ凡テ学徒ノ庠序ニアルカ如シ。偶拔群ノ昇級アリト雖モ、其氣力ト勉強ヲ保持セサレハ、人ニ異ナルノ名ヲ得ンヤ。夫ノ神童奇児ヲ看ヨ。氣力ヲ養ハス勉強ヲ惰リ長スルニ及テ凡人ニ勝ルナシ。是皆迭次ニ満足スル者ニシテ、真ニ高儒トナルノ志シナキモノト謂サルヲ得サル也。富ニ於テモ亦然リ。苟モ富豪トナリ以テ世ニ榮譽アラント欲セハ、先ツ志望ヲ立テ、當々冗々惰ルナク、智能ヲ運シ、信用ヲ確クシ、一階ヲ昇

レハ氣力ヲ加シ、復タ二階ニ達セハ、碎励ヲ強セハ、必ス富貴ナラサルモノ稀ナラン。唯ニ富ノミナランヤ。人事皆然サルヲ得サル矣。

〔欄外〕セルフヘルフ 英国サミール、スマイルス氏著書也

○天ハ自ラ助クルモノヲ助ク。

○政堂憲署ハ、陰虚ニシテ陽実ニ非ス。奸ヲ禁シ、乱ヲ遏ムルノ用多クシテ、善ヲ勤メ行ヲ励マスノ用少シ。蓋シ、保護ノ用ノミナリ。人民ノ生命ヲ保護シ、人民自主ノ權ヲ保護シ、人民ノ産業ヲ保護スルマテノコトナリ。

〔欄外〕同

○人ハ自己ノ身ヲ以テ第一ノ帮手トナスヘシ。蓋、人ノ品行ハ、無数ノ精美ナル事物ニヨリテ感化甄陶セラル者ナリ。即チ、或ハ古人ノ儀範及格言ニヨリ、或ハ吾身ノ遭際ニヨリ、或ハ文字ニ由リ、或ハ朋友ニ由リ他人ニ由リ、或ハ今日ノ世上ニヨリ、或ハ祖宗ノ遺ストコロノ嘉言善行ニ由テ甄陶養成セラル、コトナリ。此等ノ感化ノ力、誠ニ大ナリト雖トモ、然トトモ、人ニ自己ノ福祉及ヒ自己ノ德行ハ、皆身自ラ主宰トナリテ、勤メ為コトニヨリ得ルコトナリ。故ニ、智者仁人トナレルモノ、他人ノ助ヲ得タルコト多ト雖トモ、ソノ主要ハ、ソノ自己ノ身、即チ絶好ノ帮手タルベキコト、是亦夕実ニ疑ヲ容ベカラス。

〔欄外〕十五、九、廿五

○人苟モ志氣ヲ懷キ天下ニ立チ事ヲ為ント欲セハ、我希図セシ淬励ト堪忍トヲ忽カセニス可カラス。若ノミナラス、希図セシ課役易々之ヲ終ヘ、又高尚ノ志望ヲ醸サル可カラス。反之猥虚遠ノ空望ヲ画キ、之ニ適フノ能勉ナク徒ツニ将来落魄後悔世上ノ笑トナルナカレ。

〔欄外〕 山陽論利ニ富ナリ

○□ト俵米^ニ日柿木アリ。初年二十顆ヲ生ス。之ヲ進物トセシニ三個ヲ余セリ。翌年、二十顆ヲ生ス。復進物トセシニ三個ヲ不足ス。其翌年ハ三十顆ヲ生シ十個ノ不足ヲ増セリ。此ノ理如何トナレハ、事タレハ随テ不足ヲ生スルノ謂ナリ。足利尊氏義詮ノ秋ニ当リ、天下争乱寧歳ナシ。而シテ諸侯ニ課シテ其貪ヲ助ケシムル事十歳一挙ナリ。然ルニ、義政太平無事ノ時ニ在リ、諸侯ニ課役スルコト五歳九挙ナリト。実ニ天下之財蠹於粟歟蠶於庫歟。

〔欄外〕 処世大要意数件

○人ハ沈勇果断ナルヘシ。

○天地万物悉ク一利一害ノアラサルナシ。之ヲ一点ヨリ視レハ、皆利ナラサルナシ。又一点ヨリ視レハ、害ナラサルナキナリ。人間百事ノ処務亦然リ。故ニ彼此前後ヲ反覆考究シ、果断以テ決スベシ。徒ラニ左顧右眄因循情送スル勿レ。

○事物ノ抵抗ニ遭テ之レニ処スルニ、之ヲ敬シテ遠クルアリ。臆シテ避ルアリ。斃シテ勝アリ。説テ服サシムルアリ。負テ勝アリ。損シテ益スルアリ。勉メテ禦クアリ。軽事誤ルヘカラス。

〔欄外〕 修身要則

○一 余輩ハ、終身或ハ一時タリト雖トモ必ス己ノ志望ヲ立ツヘシ。

一 己カ志望ヲ立レハ、艱苦勉励、其正鵠ニ達スヘシ。決シテ惰慢ニシテ悔ルコト勿レ。

一 堪忍力ヲ養ヒ、決シテ挫折スヘカラス。半途ニシテ倦疲スレハ、全智水泡ニ属スルナリ。

一 心事体業然^{〔下モカ〕}レモ、充分勇氣ヲ励ムベシ。勇ナクンハ、成ルヘキモ遂クル能ハス。勇アレハ、難成モ

或ハ□功スルモ往々然リ。

一 度量広宏騰力健強ナルベシ。然ラサレハ、事業若今功スルト雖トモ、蟻勞蟻業ニ齊シ。大丈夫タル者、屑ヨシトセサルコトナリ。

一 活発散為ニアルヘシ。苟モ因循苟且ナレハ、假令大智天ヲ覆フ者ト雖トモ、事機ニ後レ施コス余地ナキニ至ルナリ。勉ムヘキコトナリ。

一 万事ヲ注意研究スヘシ。宇中ノ一事一物トシテ吾師ニアラサルハナク、皆吾ニ成敗ヲ報スルノ機会也。故ニ、充分ノ智力ヲ以テ之ヲ為スヘシ。

一 勉メテ人望ヲ修ムベシ。然ラサレハ、仮智能ヲ有シ、志望ヲ懷クト雖、之カ機関ヲ得ルニ苦ムモノナリ。勉ムヘキナリ。

○人ト応接談話スル、須ク彼ヲ知り己ヲ知り、而シテ発言スベシ。然レトモ、利益善惡ヲ充分抑揚スベシ。又ハ言、又ハ言ニ勝ルル場合ナキニ非ラス。注意斟酌スベシ。

一事ヲナシ、一行ヲ施サント欲セハ、各其道ニ熟練ナル人ニ就キ、其說ヲ問フベシ。然レトモ、其說ニ眩惑スル勿レ。人各好ム所、欲スル所アル者ナリ。

右十七年三月 其二ハ讓ル

農工商

〔欄外〕セルフヘルフ

○凡人ノ精力ヲ尽シ、職事ヲ務ルコトハ、最モ善キ実事智験ノ学問ナリ。彼ノ大小学校ニテ教ユル所ノモ

ノ、如キハ、実験学ニ比レハ特ニ入門ト称スヘシ。有名ナル理学士倍根^{ヘイゴン}曰、尋常書冊上ノ学問ハ、人ヲシテ之ヲ真実ノ用ニ供スル能ハス。又学サレ共才智アル人アリ。然レトモ、真実有用ノ学ハ、「ヲブセルヒイシヨン」(実物ヲ観察シ実事ヲ審察スルヲ云フ)得ラル、モノナリ。

○家主タル者ノ固守スヘキ要領ヲ仰ク

○曩ニ起キ面部頭髮ヲ清整シ、而シテ自レノ勤ムヘキ要件ヲ計リ、又家人ノ勤勉スヘキ各科ヲ指揮スヘシ。度ヲ計リ能ヲ図リ後ニ至リ咆叱嚴責セサルナキヲ予測シ、以テ其能力シテ活用ナサシムヘキナリ。

○夜ニ入り就寝ノ前、其日ノ業務ヲ追檢シ、而シテ其成否ヲ實シ、兼テ次日ノ業務ヲ予定スヘキナリ。凡テ事物ノ時間ト難易ヲ測ル、多クハ意外ニ時ヲ要シ、且難ヲ覚ユル者ナリ。故ニ是亦知ラサルヘカラス。

○娶妻ニ用スル注意ヲ騰写ス。

血族 (疾病 智愚賢否 父母兄弟遠親ニ至迄勤惰行跡)

本人 賢否智愚勤惰年齢善悪

財産 適否将来ノ見込 (進退)

兄弟 有無其賢否好癖等

醜美 貌容^下之美、称賛スヘカラス 面心ノ美ヲ選ムベシ

○職業ヲ撰ムニ汲々タル者アリ。己レノ堪否下腹シ、撰マサルヲ良トスルニハアラサレトモ、見ヨ、祖先ノ遺産ヲ有シナカラ、常ニ収支其剩余ヲナセシコト稀ナリ。然レハ、何タル大利益ヲ得ル業ト雖トモ、志ト儉勤ヲ欠クトキハ、其功アラサルモノトシルベシ。□リ現在ノ職業ヲ充分ニ精密活発ニシ、而シテ必ス

功績ヲ發スベシ。且、少事モ大事ノ如ク取扱ベシ。然ルトキニハ、終ニ大事ヲナストモ失敗スル希ナラ
ン。

格物

雜類

〔欄外〕酉五、三、東京記

○智愚与勉否氣強則勉強矣。蓋世ノ智アリト雖モ、捨之不勉与無智何扱ンヤ。利機アリト雖モ、藏之ハ尚
粗略ニ如ス。彼蟻蟻ヲ視ヨ。千丈ノ大隄ヲ入洄ス。熱心ノ極竟ニ奇働ヲ發ス例証比々タリ。勉メスンハア
ル可カラズ。

〔欄外〕晁論 參看セヨ

○凡心事故事ヲ論セス。自レノ關係セシモノハ之レヲ弁理シ、之レノ収局ヲナスベシ。然ラサレハ、蓋世
ノ智者ト故モ終日ヲ全スル能サルモノ也。

○人トシテ勇ナクンハ何事カナラサラン。其勇タルヤ、小敵ヲ悔ラス、大敵ニ懼レス、小事ヲヲロソカニ
セス、大事ニ惑トハス、小事ハ密ヲ以テ之レヲ理メ、大事ハ勇ヲ以テ之レヲ処スベシ。而後、男子ヲ称ス
ベキカ。

○水戸黃門光圀公ノ逸作アリ。曰ク、事たれハ、足るにしたかい、事たらず、足らて足すこそ、身こそや
すけれ。

我意、之レト大異也。何ントナレハ、不足而満足セハ、竟ニ一步モ抄進スルコト能ハス。闔闕ノ世態依然タリ。今日ノ有様ヲナセシハ、唯々不足ヲ満シ、欠乏ヲ補ヒ、駸々乎トシテ情欲ヲ充実セン為、工風發明ヲ擬シ漸ク以テ得タルノ開明也。光圀公ノ和詩ハ自カ為ニスル所アリテ然ルナラン乎。

○余若シ トナラハ、県下ヲ巡視シ、各地ノ民情風俗嗜好趣旨ヲ觀察シ、深慮遠謀以テ今日ノ利害ヲ謀リ、將來ノ得失ヲ論究スルノ地方政治論ヲ著作スベシ。

○余、幸ニシテ中等ノ家ニ生レ、多少ノ財産ヲ保チ、又、多少ノ智識ヲ得タリト雖トモ、猶以テ一トシテ満足安心スル能サルナリ。然ラハ如何シテ可ナルヤ。曰ク、第一身ヲ修メ、第二父祖ノ授与シタル家産ヲ増殖拡充セシメ、第三智識ヲ広大シ、論議ヲ深遠ニナシ、著作ヲ完瞭ニナシ、弁別ヲ巧達シ、以テ之ヲ事業ヲ実行スルニ在リ。而シテ、其目的ヲ成熟セシメンニハ、氣力ヲ強健ニシ淬励シテ齷齪不撓、終身一日ノ如スルニナルノミ。呼^ニ鳴、亦艱難ナルカナ矣。明、十五年、三、二二、

○自古立功者不能克其終ニ故曰非功之難保功是難矣。此坂井虎山之言也。余亦云、世非無智者不使其智施用而至遂歎無智者也。先進者之任亦重矣。

〔欄外〕五月十三、

○凡進退去就之機也。最微極妙之カ使用ヲ得ル時ハ、身立名顯以テ富貴ヲ子孫ニ伝ユルヲ得ル亦難カラス。如夫レ之ヲ誤用スルアラハ、正義智能者、却テ己ヲ削死スノ利劍也。只愚蒙ナルヲ是勝レリ矣ト云フモ過言ナラス。呼^ニ鳴、志望アル者、之ニ熟シ之ニ練シ以テ其蘊奧ヲ極ムヘキナリ。

〔欄外〕五月十三、

○凡ソ公私大小ノ別ナリ。苟モ吾頭上ヘ覆繫スル事務ハ速カニ之カ処弁ヲナスベシ。固ヨリ緩急ニ基キ、

或ハ前後スルナキニ非サレトモ、必ス之ヲ藐忽シ、或ハ放棄スヘカラス。若シ之ヲナセハ、大ナル艱難ヲ覺ユルノミナラス、常ニ狼狽ヲ極メ事勢ニ圧迫サレ終ニ其志ヲ達スル能ハス。豈速カニ勉メスンハアル可カラス。

〔欄外〕十五、五、二二六、

○苟モ人、大志遠望ヲ懷キ、其目的ヲ達セシメント欲セハ、狼リニ喜怒哀楽ノ弱情ニ惑迷スル勿レ。看ヨ、古今欧米豪傑ノ履歴ヲ。忍フ可ラサルヲ能ク忍ヒ、耐ユ可ラサルヲ能ク耐ヘ、而シテ始メテ才能ニ充分ノ活動ヲ得シメ、以テ其効ヲ発セシノミ。豈ニ耐忍謹ノ心須臾モ離ル可カラサル、知ル可キナリ矣。

因云、今古豪傑ノ士、其成功ヲ全セシモノ士農ノ別ナク、失敗枚挙ニ遑アララス。或ハ、進退維谷ルノ際、漸ク苦ミテ身ヲ逃レ後之レニ陥リ、後チ始メテ其効ヲ発ルノミ。然ルニ、智勇兼備一点ノ非難スヘキナキモノモ、一回ノ失策中途ニシテ落胆シ、或ハ屠腹ス。平ニ凡ニ失敗常ナル者ニ却テ劣ル。其故ハ、此耐忍力ノ多少ニ由ルノミ。嗚呼、記憶スヘキノ要点ナリ。

又曰、事物ニ忍耐ヲナセハ、或ハ人ノ笑ヲ来ス。然レトモ、浅近ノ誹謗ニ躊躇惑迷シ、愚人ノ群ニ陥リ、遂ニ其目的ヲ誤リ、智者ノ笑ニ遇フ可ヘカラス。

○人苟モ社会ノ表面ニ顯レ富貴ノ位置ヲ得ント欲セハ、パアシチーブテアル可カラス。必ス敢為勇進、アクチーブテアル可キナリ。

○実務師芸ヲ問ハス、苟モ従事修業スル者、其目的ヲ定メ、之ニ達センコトヲ是計ルヘシ。実務徒勞シ終ニ之カ運用ヲナサ、レハ、其之知サル者ト何扱マンヤ。故ニ、一事ヲ学ヘハ之ヲ実行シ一業ヲ得レハ亦之ヲ施為スヘシ。

○大事ニ臨ンテ果斷決行スル、之ヲ豪傑トス。小事ニ於テハ之漫行シ、大事ニ臨テハ狼狽躊躇スル、是小人ノ常情也。苟モ拔群ノ功績ヲ得ント欲ハ、此間ヲ記臆スヘキナリ。

○妄ニ喜怒哀樂之真情ヲ前貌ニ発露セシムヘカラス。前貌タル臨機応変溟宜ニ随ヒ、喜怒哀樂、情ヲ顯ハスベシ。一言一行熟慮スベキナリ。

○人常ニ言フ、事務繁多、竟ニ停滯不濟ニ至リシト。是一時ノ逃辭ニアラサレハ、人ヲ欺キ又己ヲ欺クノ言ノミ。見ヨ、堂室広大ナリト雖トモ、棚函巨多ナリト雖、間ニ之ヲ斉理セサレハ、席上錯雜散乱唯亭居ノ狭隘ナルヲ感スルナリ。反之茶味家ノ如キ、小席漸ク容膝ル者ト雖モ、斉理ノ至リシハ、更ニ狭キヲ覺サルナリ。故ニ、事務百端ナリト雖トモ、速ニ之ヲ処分シテ忘慢セサレハ亦多忙ナルナキ、必ナリ。故曰、妄ニ欺人欺己不可以為是言矣。

○慢心ハ智慮ノ行止リナリ。

○頑夫ヲ変スル甚タ難キモノナリ。道理ヲ以テスヘカラス。彼レ解セサルノミナラス、或ハ邪見ヲ以テ之ヲ判シ、不測ノ臆事ヲナスナキニ非ラス。故ニ之レヲ遵クハ、方便ヲ借り、諄々乎トシテ誘教スベシ。

○智者大物ニ接スル、之レニ反ス道理ヲ以テシ、利実ヲ以テシ、又誠実ヲ以テスベシ。慎マスンハアルヘカラス。

經世書 二卷

目次

政治

經濟

法律

道德

文学

家政

三業

雜類

政治

○政治上ニ関シ、又ハ農工商ニ由リテ政治上ニ係ル事物ニ注意シ、以テ我意見ヲ列叙スヘキナリ。

○食塩多ヤ漸々粗悪ニ流レ、且重量モ輕減不同アリ。是実ニ製地ノ評判ヲ汚シ、自然衰亡ニ至ルノ原因ト云ハサルヘカラス。因テ此悪弊ヲ改ル、此法律ヲ設ケスンハアルヘカラサルナリ。

○製蚕茶ニ従事スル者タルヤ、口文明ヲ唱フルト雖、其心未タ其域ニ進マス。故ニ管見ヲ守株シ、精良ノ品物ヲ製スル能ハス。遂ニ損益相償ハス、半途ニシテ其業ヲ廢シ、嗚呼、到底取利ナキモノト臆斷スルニ至ル。慍ムヘキナリ。故ニ之レカ法則ヲ設ケ、精良ノ品物ヲ製シ、海外ニ美名ヲ博シ、以テ永遠大

利ヲ占シメンコトヲ為スヘキナリ。

○農夫タル者、概ネ祖先伝來ノ耕耘施肥法ニヨリ自許満足スル者ナリ。而シテ之レカ改良ヲ謀リ、收穫ヲシテ加倍スルノ長方ヲ索スルノ精神、毫纔モナシ。之レヲ評シテ、天ヨリ授ケラレタル尊賜ヲ□□魯鈍ナル己ノ薄能ヲ墨守シ、之レニ專任スル者ニ似タリ。愚モ亦極レト謂フベシ。此先進者誘援シテ天賜ヲ受ケシムヘキナリ。

○職人ノ等級ヲ定メ、且時間法ヲ立テナハ、其益鮮少ナラス。是、執政者ノ任ト云フヘキリ。^{ナリ也}（二業ノ部ト参照スヘシ）

○遠臨台ノ航海者ニ必要タル、言ヲ俟タス。然ルニ我村ノ遠台、其名アリテ実ナシ。遺憾ト云ベシ。故ニ之レヲ改良スルヤ、必務タルナリ。

○県會議員、即人民代議士タル者ヲシテ平生ニ於テ県下ヲ巡視シ、以テ風俗人情智愚職業等ノ進否良惡優劣勤惰及苦樂ヲ探知セシムベシ。何ントナレハ、仮令人民ノ代議士ト雖、甲ハ乙ヲ知ラレ丙ハ乙ニ通セサルアルハ、県會開設日猶淺ノ今日ニ於テ逃レサル所ナリ。果シテ然ラハ、其議士ノ發言又ハ決議スル所全体ニ関シ或適合セサルナキヲ保シ難シ。若シ、十ノ一タモ然ル有ルトハ、切角ノ會議モ或ハ開設セサルニ如カサルノ嘆息ヲ吐カシムルナキニアラス。故ニ、執政立法ノ大權ヲ執ル者、茲ニ鏡ミ、急其法ヲ設ケ余実加益ナスベシ。大事業ノ如ニ至リテハ、特ニ委員ヲ命シ專探セシムヘキハ勿論ナリト云フベシ。

○鐵道ヲ敷設スヘナシ。然シナカラ貧弱ノ郡県ナルカ故ニ名按ヲ設ケ奇法ヲ編シ、而シテ其目的ヲ達スヘキナリ。

○吾国タル鉞産海産ニ富ム、言ヲ俟タス。故ニ速ニ良策ヲ設ケ、遺利ヲシテ興起世用　セシムベシ。
○県吏タル者ハ、人民ニ接スル近ク且ツ密ナリ。而シテ其行政上ニ於テ人意ニ反スル者追々之レアリ。
是レ多ク他県人其職ニ就キ、且人情風俗ニ通セサルノ致ス所タルヤ必セリ。之ヲ矯制セント欲セハ、可
及的県人ヲ県吏ニ採用シ、而シテ重要ノ法則ヲ設クルニ当リ、殊ニ常置委員又ハ県会ニ諮問スベシ。而
後稍良治ヲ得ベシ。

○漁業者タル者ハ、獲魚ヲ以テ衣食ヲ給スル者ナリ。而シテ其収獲タル年ノ寒暖等ニ因シ甚タ不均ナル
モノニシテ、大漁ナルトキハ所謂賤民ノ常情、明日ヲ謀ラス、随テ獲レハ随テ奢侈シ、又一銭モ余サ、
ル慣弊ナリ。故ニ若シ不漁ヲ来ストキハ、赤貧洗フカ如ク借財積テ山ノ如ク、困難深ク海ノ如シ。或ハ
家資ヲ典シ或ハ子女ヲ売り、一時危急ヲ済スト雖トモ、再ヒ多獲アレハ後同然ヲ履ム者滔々タル天下ノ
漁夫、皆然ヲサルハナシ。之カ節儉済救法ヲ設クル、治者ノ任タル者ニシテ、敢テ交渉スルニ非アラサ
ルナリ。又曰、独リ漁者ニ止マラサルナリト。

○不景氣ヲ医スルハ、政官ノ冗官ヲ沙汰シ、浪費ヲ節減シ、以テ租税ヲ減節スルニアリ。

經濟

法律

道徳

文学

○方今、有志ノ士タル者ハ、唯譚カニ東京ニ遊学シ、学業既ニ成レリト自信スルハ、世ノ文明ヲ知ラサル管見小人ト評セサルヲ得ス。然ラハ如何シテ可ナラン。曰ク、海外各国渡航シテ、文明界ノ新理新事ヲ両輪スヘキナリ。而シテ是男子トイフヘキナリ。

家政

○君子者、其責己也重以周、其待人也輕以約矣。故ニ立身挙名セント欲セハ、之ニ適スル艱難ナカルベカラス。或ハ形ヲ以テシ、或ハ心ヲ以テスベシ。世ニ虎ヲ画カント欲シ、猫ニ似サル者アリ。是レ富貴ヲ「嚙」ンテ、勉強ノ実ヲ修サルモノナリ。恰モ種子ヲ播カスシテ、徒ニ收穫ヲ期スルニ齊シ。宁口初ヨリ達名ヲ望マサルノ失敗ナキニ如カサルナリ。

○凡事聡明慧智ト雖、必ス成功ヲ期シ難シ。故ニ幸ニ成功スルトキハ好シ。若シ失錯輶轄スルニ至レハ、其備□予メ計畫スヘキニ非サレハ、噬臍踵ヲメグラサ、ルナリ。

○名達ヲ得ント欲セハ、其レニ適スル事業成功ナカルベカラス。而シテ成功也。進取ノ働ヲ要シ、勉強才智トヲ充分適當ニ用ユヘキナリ。

○由断ナスヘカラス。光陰ニ由断スレハ、大逝ニ至リ悔ルモ追ヘカラサルナリ。事物ニ由断スヘカラス。事敗レ物変シテ及ヘカラス。人ニ由断スヘカラス。善悪正邪分チ難シ。否、変スルヲ察セラレス。故ニ由断ハ須刻モスヘカラス。若無ルトキハ悔ルモ後悔ラサル也。

○処世法タルヤ尤難ナリ。正直名智等ノミニシテ全カラス。八分。注意。癖。知彼。間接。勉強。緩急。

信用。活発。実着。堪忍。方便。機転。穎才。秘句。隱情。不語。使人。一日。宥恕。終世。因与果。

○事物ヲ等閑ニ付シ放棄スルトキハ、其結果タルヤ、所謂浮徒ノ未来ニ大苦惱ヲ受ルノ如キ加倍ノ困難紛乱ヲ生スルノミナラス、或ハ復収局スヘカラサルニ至ル、皆是レナリ。故ニ事物ニ繁多ナカラシメ盛大以テ吾目的ヲ達セント欲セハ、緩急ノ度ヲ謀リ、寸隙アレハ閑漫ノ争ト雖トモ決シテ忘却失念スヘカラス。故ニ曰ク、繁忙ニシテ精神余裕アルベシ。散閑ト雖トモ、心身繁多ナルヘシ。

○廟堂ニ「高」生スル者ヲ快樂トナス乎。人車ヲ挽キ牛馬ニ御スル者ヲ苦難トナスヤ。否、然ラス。大苦ハ廟堂ノ士ニアリ。大楽モ亦同士ニアルナリ。車夫ノ如キ者ハ小苦小楽ノミ。是、人ノ高下尊賤ノ別ル、所ナリ。而シテ、苟モ男子タル者ハ、自進テ己ノ力ノ及ハン限り百難ニ当リ百快ヲ撰ルベシ。決シテ婦女子ニ類スル如キ所為ヲナシ後世子孫ニ輕侮サル、勿レ。学士豪商其他高尚ノ業行ヲナス、皆然ラサルハナキナリ。

○負担責任タルヤ、大小尊賤ノ関セス速ニ緩急ノ度ヲ謀リ之レカ処理ヲナスベシ。然ラサレハ、己ノ信用ヲ社会ニ失フノミナラス、恒ニ事務ニ紛乱錯雜出来、是損害ヲ醸スノミナラス、艱難ヲ極メ漸ク曖昧ニ処弁スルニ終ルノミ。故ニ閑時ニ際シ、勉々忙時ニ密ニ所理スヘキ也。經驗上皆然リ。片時モ等閑スヘカラサル者ナリ。

○財務ヲ放棄スル□如□□不精ヲ可トスルニアラス。亦必確ヲ得ル易キニアラス。□之前ト消長ス害悔ベシ。即□万般然ラサルナシ。悔悟スヘシ。其間得ル更ニナシ。唯吹烟トグズグズシタルノミ。嗚呼、覆轍ノ悔ナキヲ□セヨ。

三業

○中長塩粗悪ニ流レリ。是、実ニ製造者ノ大不利タルモノ也。一時眼前ノ小利ニ暗迷シテ遂ニ遠永下上ノ大利ヲ失フ、実ニ漸々衰微ノ前徵ト謂ヘシ。故ニ速ニ之カ改良ヲ謀ルヘキナリ。此悪弊ニ墮ル、独リ塩業ノミナラサルナリ。

○百般事業ニ器械力ヲ增長セシメサルヘカラス。然ラサレハ劳多シテ功少ナキナリ。然リト雖トモ、徒カヲカニ器械力ニノミ依頼シ実施セント欲スレトモ、今日ノ世態ニテハ失敗セサルヲ保シ難シ。何ントナレハ勉强余リテ其他ヲ望ミ、而シテ始テ氣力ヲ利用スルニ至ル。是、真ノ順序ナリ。

○日本ニ於テハ職人ニ規律ナク、故ニ進歩者ナシ。又、給料モ廉ナラサルヲ得ス。因テ各職人ヲ至当ノ法方ヲ設ケ等級ヲ確定シ其職業之時間ヲ定メナハ、職人雇主モ共大利アラン。

○地主ト小作人ノ合トニ於テ、猥リニ重圧ヲ定ムヘカラス。地主タル者ハ、小作人ヲ充分誘導ノコト。

○智恵ナキニ非ラサレトモ、智一以テ信頼スヘキニ非ラス。巧拙ナキニ非ラサレトモ巧一以テ信任スヘキニアサスヲカ。智ト雖トモ之レカ活用ヲヲコタレハ、無智ト何ソノ扱マン。巧亦然カリ。且、愚拙ト雖トモ、不撓ノ氣象ト不息ノ勤勉トヲナストキハ、愚ハ智トナリ拙ハ巧トナル、難キニアラサルナリ。故ニ智愚ニ関ラス不撓ノ氣象ト不息ノ勤勉トヲ以テセサレハ、迭次ニ智愚巧拙、其処ヲ異ニスルノ奇譚ナキヲ保シ難シ。有為之士鑑スンハアルヘカラス。

雜類

○凡事物突然意外ニ出ルトキハ、妄リニ之レカ応答ヲ為スヘカラス。能其原因性質ヲ質シ、思考シ、而ノ

後、之レニ当ルヘシ。決シテ狼狽妄応スヘカラス。

○予、帰郷シ、家居スル既ニ五年（十二年九月 日着 十六年十二月廿二日也）、其間、家務ニ繫累スル全般ニアラス。而シテ学業進歩遅々タル悔ユベシ。今ヤ既ニ家政ヲ担佐ス。然ルト雖苦節大目的タル富貴ノ二達ヲ全然成功ヲナサシムベシ。之レヲ得ント欲セハ、其ニ対スル心勞ナカルヘカラス。嗚呼、難カナ。

注

(1) 前芝村、加藤家、加藤六蔵の経歴の詳細は、拙稿「一八八〇年代における地方名望家の展開——愛知県前芝村・加藤六蔵を例として——」川口浩編著『日本の経済思想世界——十九世紀の企業者・政策者・知識人——』日本経済評論社、二〇〇四年を参照。

(2) 郷土豊橋を築いた先覚者たち編集委員会編『郷土豊橋を築いた先覚者たち』豊橋市教育委員会、一九八六年、二四六頁。豊橋市史編集委員会編『豊橋市史』第二卷（近世編）、豊橋市、一九七五年、八一五—八一六頁。

(3) 田崎哲郎編著『三河地方知識人史料』愛知大学総合郷土研究所、二〇〇三年、三一—三二頁。

(4) 前掲『豊橋市史』第二卷、八一—八三頁。

(5) 小山喜久弥『福沢諭吉先生と豊橋』中村道太銅像建設委員会、一九六一年。富田正文『福沢諭吉と中村道太』田辺久夫編『三田評論』九〇二号、慶應義塾、一九八九年四月など。

(6) 穂積清軒については、前掲『豊橋市史』第二卷、八三六—八三八頁。同三卷（一九八三）、九四八—九五二頁。前掲『郷土豊橋を築いた先覚者たち』一八二—一八三頁など。

(7) 『慶應義塾学業勤惰表』一八七五年—一八七九年。福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』第二卷、慶應義塾、一

九八六年、九頁。

- (8) 前掲「一八八〇年代における地方名望家の展開」。
- (9) 加藤六蔵「政治」『経世書』二卷(以下「経世書」は省略)、同「政治」二卷。
- (10) 同前「三業」二卷。
- (11) 同前「家政」一卷。
- (12) 同前「家政」一卷。
- (13) 同前「家政」二卷、同「家政」二卷、同「雑類」一卷、同「雑類」一卷。
- (14) 同前「政治」二卷、同「政治」二卷。
- (15) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編二五 近代二 政治・行政二』愛知県、二〇〇九年、一四四―一四六頁。
- (16) 『明治人名辞典Ⅱ 上巻』日本図書センター、一九八八年(底本:日本現今人名辞典発行所編『日本現今人名辞典』明治三十三年)、かノ三十。
- (17) 前掲「三業」二卷、同「三業」二卷。
- (18) 同前「雑類」一卷、同「雑類」二卷。
- (19) 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史』第三卷(近代編)、豊橋市、一九八三年、九四二頁。
- (20) 前掲「雑類」一卷、同「雑類」一卷、同「農工商」一卷。
- (21) 同前「教育」一卷、同「家政」一卷。
- (22) 同前「教育」一卷。
- (23) 同前「政治」一卷、同「雑類」一卷。
- (24) 同前「経済」一卷、同「経済」一卷。

- (25) 同前「家政」一卷。
- (26) 同前「家政」一卷。
- (27) 同前「教育」一卷。
- (28) 同前「雑類」一卷。
- (29) 同前「教育」一卷、同「農工商」一卷、同「教育」一卷。
- (30) 松本三之介『明治思想における伝統と近代』東京大学出版会、一九九六年、五〇頁。
- (31) E・H・キンモンス、広田照幸ほか訳『立身出世の社会史』玉川大学出版部、一九九五年、六三―七七頁。
- (32) 山口左七郎については、金原左門『福沢諭吉と福住正兄——世界と地域の視座——』吉川弘文館、一九九七年。渡辺尚志編著『地方名望家・山口左七郎の明治維新』大学教育出版、二〇〇三年など。
- (33) 伊東については、拙稿「江戸から明治へ——明治初期における地方企業家の経済思想——」川口浩、ベティーナ・グラムリヒ・オカ編『日米欧からみた近世日本の経済思想』岩田書院、二〇一三年、二八九―三三三頁を参照。
- (34) 下村については、拙稿「一八八〇年代における実業思想と地方企業家——長野県上小佐久地域と下村亀三郎——」日本経済思想史研究会編『日本経済思想史研究』第三号、日本経済評論社、二〇〇三年三月、二七―四五頁を参照。
- (35) 武石典史「明治前期東京における中等教育の趨勢——伝統学知から近代学知へ——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』四五巻、二〇〇六年三月、九四頁。
- (36) 川口浩「日本における大学の誕生」川口浩編著『大学の社会経済史』創文社、二〇〇〇年、九四―九六頁。
- (37) 木暮については、拙稿「明治期における地方企業家の経済思想——群馬県伊香保村・木暮武太夫を事例として——」『経済研究 研究報告』二〇〇号、大東文化大学経済研究所、二〇〇七年三月、三七―四九頁を参照。
- (38) 福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶應義塾、二〇一〇年、八二―八三頁。
- (39) 穂積清軒『好問社女子教育仕法書』一八七二年七月。

- (40) 森鷗外『渋江抽斎』岩波書店、一九九九年、二八九―二九〇頁。
- (41) 榎信一郎『東京遊学案内』山縣順、一八九〇年、七二頁。
- (42) 同前『東京遊学案内』一二六頁。
- (43) 内山正如編『官私立諸学校就学案内 日用百科全書第三七編』博文館、一八九九年、一六一、一六五頁。
- (44) 木村直恵『〈青年〉の誕生——明治日本における政治的実践の転換——』新曜社、一九九八年、三三三頁。
- (45) 福沢諭吉「慶應義塾学生諸氏に告ぐ」一八八六年二月二日、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一〇巻、岩波書店、一九七〇年、五五二―五五三頁。
- (46) 同前「青年輩の失敗」『時事新報』一八八三年七月五日、同前『福沢諭吉全集』第九巻、八三頁。
- (47) 同前「士人処世論」一八八五年、同前『福沢諭吉全集』第五巻、五三六、五四二頁。
- (48) 前掲「青年輩の失敗」一八五頁。
- (49) 竹谷俊一宛福沢諭吉書簡（一八七九年九月二八日）慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第二巻、岩波書店、二〇〇一年、二五三頁。
- (50) 「交詢社設立之大意」桑田豹三編輯『交詢雑誌』交詢社、一八八六年三月一五日。
- (51) 川口浩ほか『日本経済思想史 江戸から昭和』勁草書房、二〇一五年、二〇四頁。
- (52) 新井博次「帰省偶感」『古河郷友会雑誌』二号、一八九二年一〇月。
- (53) 前掲「文学」二巻。
- (54) 坂根嘉弘『日本伝統社会と経済発展〈家と村〉』農山漁村文化協会、二〇一一年、一三五―一三六頁。
- (55) 白紙を含めた総頁数。一卷目次「三業」の文中タイトルは「農工商」であり、脚注でも「農工商」と記した。

【謝辞】すべて文責は筆者にありますが、一部の史料解説について、小室正紀慶應義塾大学名誉教授に過日ご指導をいただきました。ここに御礼申し上げます。